

武士道と禪

木村 靜雄

武士によつて代表せられる鎌倉時代以後室町戦國の時代精神は、宮廷貴族によつて代表される平安朝末期のそれと全く對照的である。平安末期に於いて、人々は著しく感情的であり又官能的であつて、道徳的理想若くは理性の如きは之を没却して憚からなかつたが、武士は一面現實的であると共に一面極めて理想的であつて、一定の目的實現の爲めにはあらゆる慾望や感情を抑制する強固なる意志を持つた。又平安末期の人々は宿命論者であり、決定論者であつて、彼等の人生は陰陽道や宿曜道の説によつて十重二十重に縛られ、先づ方違や時の忌を占はなければ日常生活は固より、政治すら行はれざる有様あつたが、武士の群はあらゆる意味で自由人であつた。又平安末期に於て、人々は極めて厭世的であり現實的には無力であつたが、武士は死を名譽にしつゝもその死は現實の生を最も完全ならしめ光輝あるものとする爲めの死であつた。すべてこれらの時代的推移の中に、武士勃興の國民精神史的意義の重大性があるのである。

武士は元來地方の豪族や廣大なる莊園を持つ寺院等によつて養はれた自衛の傭兵から起つたものであり、山林草澤の間を馳驅して狩と戦ひの中に實力と或る種の徳義を養つたに過ぎないのであるが、その活氣に溢れた素朴な健康な純粹な精神は、能く、精神的暗黒時代とも云ふ可き當時の時代相を一掃して、全く亡國の兆を呈してゐた國民精神上の危機を脱却せしめた。然して此の光輝ある武士精神は全く彼等自身の境遇から生れたものではあるが、それに思想的背景と基礎を與へ、無限の深味を加へて、之を助長したものは禪であつた。單に剛強殺伐なるのみでは道と云ふ事は出來ない。生死を脱却して隨處に自由なる禪の風光は、そのまゝ武士の理想となつた。同時に禪僧の意志的な簡素な生活振りは又武士の最も共鳴する所であつたらう。かくて禪と武士精神はその本質に於いて結合したのである。

二

禪が眞に武士教養の理想となつたのは、鎌倉幕府に於ける北條時頼、時宗の參禪以後であらう。彼等は鎌倉武士の統領としてその修養生活は當時一般の士風に大なる感化を及した事と思はれる。

時頼は初め蘭谿道隆に歸依して爲めに建長寺を建て、自ら剃髮して専心修禪に努めたのであるが、後、兀菴普寧に就いて終に大悟徹底した、その消息は兀菴普寧禪師語録に詳しい。其の臨終に際しては、袈裟を着し繩床に倚り、「業鏡高懸、三十七年、一槌打碎、大道坦然」なる一偈を遺して安

然として世を去つた。是れ武士か、是れ禪師か、誠に堂々たる境涯である。幕下の武士に與へた影響は量り知る可からざるものがあつたと思はれる。

時宗は亦、初め蘭溪道隆に付き、後、大休正念、子元祖元に付いて孜々として參禪し、彼の文永、弘安の國難に際し、悠々法要を商量しつゝ能く大事を誤らなかつた事實は是亦語録に詳しい。

かく當時一代の輿望を擔ひ武門の棟梁と仰がれた將軍が二代まで引續き絶大なる禪の歸依者であり、壽福寺、常樂寺、禪興寺等に次いで建長寺、圓覺寺等の大禪刹が續々建立さるゝに及び、鎌倉武士は翕然として是等の禪門を叩いた事であらう。當時の諸禪師の語録に記された武士の名のみで略々六十餘人を算する事が出来る。然してその効果も亦偉大なるものがあつた事は、北條氏滅亡に際して尙能く次の如きエピソードを残した事によつても窺はれる。太平記卷十に云く。

「鹽飽四郎、抜いたる刀を收めて、父の入道が前に畏つてぞ候ひける。入道これを見て、快げに打笑ひ、閑々と中門に曲録をかざらせて、その上に結跏趺坐し、硯取寄せて自ら筆を染め、辭世の頌をぞ書きたりける。

提持_{シテ}吹毛_ヲ 截斷_ス虚空_ヲ 大火聚裏 一道、清風

と書いて、又手して頭を伸べて、子息四郎に、「それ討て」と下知しければ、大膚脱_{はたはぎ}に成つて、父の頸_{くび}をうち落して、その太刀を取直して、鐔_{つば}本まで己が腹に突貫つて、俯_{うつむ}様にぞ臥したりける。」

誠に痛快豪快の極みである。又、長崎次郎は最後の戦陣に臨むに際し、崇壽寺の南山和尚を訪ね、甲冑のまゝ庭に立つて左右に揖して問ふて曰く、「如何ナカカ是勇士けん慟ん事。」和尚答へて曰く、「吹毛急ニ用ヒテ不如カ前ムニ。」と。高重はこの一句を聞いて、問訊して辭し、最後の勇戦を試みたのであつた。(太平記卷十)

三

然しながら、眞に禪が時代の指導精神となり、武士の缺く可からざる教養として一般に普及するに至つたのは、足利時代以後の事ではないかと思はれる。それは必ずしも、覇權と共に禪宗の中心地が京都に移り、夢窓國師一門の名僧が足利尊氏、直義を初め、細川、赤松等幕下の諸將の歸依を受けて、五山十刹の輪奐の美を競つた事のみを指すのではない。入元、入明の禪僧漸く多く、大陸との交通も次第に開くに及び、宋元の文化は續々と輸入せらるゝに至つた。宋學、水墨山水を主とする宋元畫、禪院建築、彼地禪僧の墨跡等がこれである。然して是等は何れも禪精神を基調とする禪文化であつて、性理を明むるを主眼とする宋學、墨一色を以て氣韻生動を描かんとする南畫等は新鮮なる影響を我國にもたらした。同時に禪的精神が國民の間に浸潤するに及び、我國獨特の禪藝術も亦生れるに至つた。能樂、茶道等がそれである。かくて足利より戰國にかけて禪が時代文化の基調となり指導精神となるに及んで、當時僧侶を除いて最高の知識階級であつた武士の生活も著し

く禪味を帯ぶるものとなつた。彼等は襖に水墨畫を畫き、床に禪僧の書を掛け、或は一椀の抹茶を樂み、或は謠曲を吟じ能樂を鑑賞した。意識的にも無意識的にも武士の教養と生活は禪的なるものになつたのである。

然るに五山の禪僧が漸く詩文に耽溺して本來の面目を失ふに及び、黙々として潜行密用しつゝあつた應燈關の一派は大徳寺、妙心寺を中心として次第に四方に流播して、廣く戰國武將の歸依を集むるに至つた。先づ今川義元の歸依した大原雪齋禪師は妙心寺の大休宗休禪師の法嗣である。武田信玄は初め天台に歸依したが、後、禪に歸し、惠林寺を建て、惟高妙安(相國寺)策彦周良(天龍寺)明叔慶濂、希庵玄密、岐秀天伯、快川紹喜(以上妙心寺)等の名僧に參じた。有名なる信玄家法の第一條に、

一、參禪可^レ嗜^ム事、語ニ曰^ク。參禪別ニ無^シ秘訣。唯思^フ生死ノ切^{ナル}ヲ

とある程である。上杉謙信は不識の號は曹洞宗の僧より受けたと言はれるが、二十四歳上洛の節、大徳寺で徹岫宗九から三歸五戒を受けたと云ふ。北條氏は早雲の遺命により大徳寺から以天宗清を迎へて、金湯山早雲寺を開いた。三好長慶は大徳寺出身の大林宗套に參じて、宗套が當時住した南宗寺の四邊を過ぎる時には必ず下馬して敬意を表したと云ふ。又、長慶平素人に語つて、敵の利堅なるものは必ず是を破摧するも和尚の猛威には敵し難いと嘆じたと云ふ事が大林和尚塔銘に見える。

澤彦宗恩（妙心寺）は織田信長の父信秀の歸依を受けたが、信長の名を撰し、政秀寺の開山となり又岐阜城の名を撰び、天下布武の印文をも撰したと云ふ。大内義隆は玉堂宗條（大徳寺）に付いて三玄密旨を究明し、法號を宗雄とした事が畫像の賛によつて明かである。毛利元就は東福寺の竺雲惠心と親しくその斡旋により朝廷に御即位料を献上した事がある。又、豊太閤は大阪城にあつて妙心寺の南化玄興の提唱を聞いたと言はれ、その臣下千利休は茶禪一味を以て有名であり、豊公幕下の部將達に偉大なる感化を與へた。石田三成、脇坂安治、副島正則、石河光重等多くの諸將は妙心寺山内に各々香華寺を建立してゐる。

かくの如く戰國時代に至つて關山系即ち松源派の禪の進出著しいのは、當時己に五山系の文字禪に對する批判認識が存したのであらうと思はれる。戰國時代に於ける代表的な武將が、實參實究孤跪嶮峻を以て家風となる關山系の禪に争つて歸依した事實は、特筆す可きものである。

四

然らば武士の精神武士の思想は何故にかくも緊密に禪と結付くのであらうか。

大應國師法語に曰く、

「夫、生死を出る道は、佛祖の示す所なりと雖も、其源を尋ぬるに、心を明むるに過ぎたるはなし。然るを人皆心即佛なることを知らず、外に佛を覓め、徒に疲勞して終に實理に稱ふ事無し。

譬へば南に行ける親を知らず、其子北をたづねて行くが故に、行くに随つて彌々親に遠かるが如し。」

又云く、

「佛は善惡の起る源を知つて執心無き故に鎮へに念を起せども無念となる。無念の處を暫く心といふ。心と云ふは名のみ有つて實形はなし、古人は無心といへり、斯様に心得なば、念より結ぶ生死は有る可からず、此の如く見て知りはつるを、一分の見性得果と云ふなり、其上には願ふべき生死もなく、欣ふ可き極樂もなし、迷悟の隔ても無く、凡聖の差別もなし、此處を生死を離るゝと云ひ、淨土に往生すると云ひ、佛に作るとも云ふなり。」

極めて直截簡明な垂示である。人は唯自己心性を明むる事によつて生死を脱却する。自己以外に頼む可き佛もなく往く可き淨土もない。唯自己自心を究明するを以て足れりとする。かゝる教へは元來自主的現實的自力的性格を有する武士の信念を養ふ上に極めて力強い思想であつた。

又曰く、

「佛祖の言はいかでか疑ふ可き、偏へに斯様に信すべし、明暮起ても居ても斯様に振舞ふ者は何者ぞと能く見れば見る者もなく、見らるゝ者も忘れはてゝ、力竭き神疲ればてたる處を少し力を得たりと申すなり、此に至て覺えざるに我が本姿の不生不死、埋めども埋れず、焼けども焼けず

喜も憂もあらざる處を知るなり。是こそ眞の佛、法身の如來と申すにて候。」

教理は極めて簡明であり何の神秘も幻想も含まないが一度び悟入すれば、くめども盡きぬ慈味あり、深か味あり、能く武士の精神生活の高き理想たり得るのである。

武士道は後、徳川時代に入つて儒教の影響を受け、種々の道德的徳目を附せられたのであるが、かゝる倫理的形態を備ふる以前の剛強素朴なる武士に深き精神的内容を與へ國民精神的にも文化的にも偉大なる貢獻をなした禪は、又鎮護國家の十分なる使命を果したものと云ひ得られると思ふ。禪の護國的意義は將來に於てもかゝる國民精神作興の觀點から論ず可きものと思ふ。

以上

平泉博士著「中世に於ける精神生活」 林倚雲氏著「日本禪宗史」 大久保道舟氏著「日本禪の特質とその文化への影響」 柏倉亮吉氏著「戦國武將、禪、その意義」等参照。

題 春風館

山岡鐵太郎

論^レ心^ヲ總^テ是^レ惑^ヒ心中^ニ

凝^滞スレ^バ輸^入ニ^還テ^失フ^工ヲ

要^スレ^バ識^ラント^ス 劔家精妙ノ處^ヲ

電光影裏斬^ル春風^ヲ